筑紫女学園大学リポジト

The Buddhist Paintings in Northern Kyushu

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-10-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小林, 知美, KOBAYASHI, Tomomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/455

北部九州の仏教絵画
― 経典のための画像 ―

小　林　知　美

The Buddhist Paintings in Northern Kyushu

Tomomi KOBAYASHI

はじめに

九州の仏教絵画に関して、とくに平安時代以前における当地での制作・受容状況に関しては不明な点が多い（注01）。現存作例と文献記録の双方ともきわめて限定されていることがその原因である。本稿では、北部九州の仏教絵画について、とくに経塚遺物である経筒と外容器に施された画像を切り口として、その制作・受容の場としての法会の視点から考察する。

第１章　北部九州の仏教絵画

第１節　現存作例（国指定重要文化財）

古代九州においては、筑前大宰府（注02）・豊前宇佐を中心とする北部九州が文化の先進地であった。考古学の発掘調査結果から九州の古代寺院を概観された小田富士夫氏は、７・８世紀に出現した寺院のうち、官寺・准官寺以外の豪族の私寺（氏寺）が九州全体で33ケ寺を数える中で、一郡に二三ケ寺以上存在する例として豊前宇佐郡、同京都郡、筑前御笠郡、肥後益城郡を挙げられており（注03）、北部九州地域における私寺の集中が指摘できる。また中野幡能氏は古代の宇佐宮領について述べる中で、平安時代の九州管内において最有力であった荘園領主の安楽寺と宇佐宮と弥勒寺がすべて北部九州にあり、その経済的勢威を伺うことができるとされる（注04）。早くから美術史研究者の矢崎美盛氏は、中央とは異なる地方様式研究の必要性を説かれ、九州美術史の地方様式の４大区分を【表１】のように提示された（注05）。

以上の考古学・歴史学・美術史学研究の意見が一致するように、平安時代以前の九州美術史は

北部九州を中心として考えることができる。

【表１】 九州地方様式の４区分

名　称	中心地域	内容（現存作品）	時　代
福岡地方様式	福岡県中南部～ 佐賀県の一部～ 熊本県北部	奈良時代創建の観世音寺を中心とする。中央での様式発展と密接な関係。（観世音寺の仏像）	奈良時代
大分地方様式	国東半島中心 大分県中部～南部	国東半島地方に著しく展開した天台密教。（真木大堂、富貴寺、石仏）	平安時代
人吉地方様式	熊本県南部中心 福岡県南部に波及	相良氏が荘園を得て移住し、盛んに仏教美術を営んだ。	鎌倉時代
長崎地方様式	長崎中心	鎖国下の日本で、西洋美術、中国美術、黄檗美術の移入で成長。	江戸時代

平安時代以前の北部九州の仏教絵画について、まず現存作例の指標として、国指定重要文化財から見てみたい。北部九州３県の指定作品の数は【表２】のようになる（注06）。平安時代以前の仏教関係作品数を（　）に入れて示したが、絵画では平安時代以前の仏教関係作品は４件、そのうち福岡の３件は福岡市美術館所蔵（松永コレクション）の作品で、現地で制作されたのは大分県の富貴寺壁画１件のみである。一方、彫刻では平安時代以前の仏教関係作品が61件と数多く、書跡・典籍は４件、考古資料は経塚関連の14件である。国指定重要文化財に限定した場合、都周辺以外の地域の常として、北部九州の平安時代以前の仏教絵画の数は決して多くはない。

【表２】北部九州３県の重要文化財　　※（　）内は平安時代以前の仏教関係作品数。

県　名	絵　画	彫　刻	書跡・典籍	考古資料
福　　岡	23（３※他県から）	49（30）	21（４）	40（11）
大　　分	５（１※富貴寺壁画）	31（23）	１（０）	３（１）
佐　　賀	２（０）	13（８）	９（０）	９（１）
３県合計	30（４）	93（61）	31（４）	52（14※経塚関連）

しかし狭義の絵画に分類される作品が少ないとはいえ、実際には、書跡・典籍、考古資料などに絵画が施されていることがしばしばあり、とりわけ仏教美術の領域では、考古資料の経筒の線刻画などは重要な絵画資料となる。本稿で仏教絵画を検討するにあたっては、考古資料の経塚関連遺物に含まれる絵画的作品にまで考察の範囲を広げる。

第２節　文献記録上の作例

次に、北部九州の仏教絵画の状況を文献記録から検討する。【表３】は、仏教公伝から平安時代までの北部九州の仏教絵画に関わる事項を史料集成から抜粋したものである（注07）。絵画と書籍・典籍では狭義の仏教絵画と書籍・典籍の作品や作者を、法会では官寺と准官寺・安楽寺・六郷山それぞれにおける法会を拾い出した。もとりより検討が不十分ではあるが、北部九州の仏教絵画を俯瞰するために掲げる。

【表３】北部九州の仏教絵画関連事項（欽明天皇13年〈538〉～建久3年〈1192〉）

※（　）は西暦、◎は現存作例、アルファベットは引用元の史料集成（注07参照）を示す。

	事　項
絵画	釈迦牟尼仏像（740A）、千手観音ならびに四摂八供養摩訶薩埵等十三尊（807A）、宇佐若宮八幡宮神影（825A）、大元帥画像等（839A）、一万三千仏像（871A）、十一面観音像（884A）、六観音像（995A）、菅神像（1032A）
書跡・典籍	金剛般若経（735C、847C）、法華経（803C、807、852C、905C、1102A、◎1112A、◎1113A、◎1143A、◎1172A、◎1192A）、宸筆金泥法華経（1100A）、法華経千部（984B）、色紙法華経（1100A）、金光明経（803C）、般若心経（807）、一切経（833C、905C、◎1187A）、仁王経（852C）、大毘盧遮那真言（852C）、金剛頂真言（852C）、大般若経（905、995A）、◎宋版大般若経（1132A）、華厳経（803C、905C）、大宝積経（905C）、放光般若経（905C）、涅槃経（803C）、注涅槃経（905C）、十輪経（905C）、阿含経（905C）、◎高麗の紺紙金字弥勒成仏経（1015A）、熾盛光仏頂大徳銷災大吉祥陀羅尼（1091C）、息心抄（1162D）
法会	※官寺・准官寺（国分寺・観世音寺・四王寺・竈門山寺）関連 戒壇院（761C）、四天王法（801）、四王寺悔過（820C）、布薩（855C、1120C）、放生会（855C、1120C）、一切経会（1120C）、仏名会（901C）、両部大法（1003C）、長講（1120C）、観音講（1120C）、悔過（1120C）、仁王不断経（1120C）、 ※安楽寺関連 二季勧学会（1046B）、示現五時講（1084B）、大乗講（1091B）、法華六十巻談義（1110）、法華千部会（1162B）、談義百箇日（1166B）、日別御供（1168B）、法華三昧（947B、998B、1022B、1023B、1025B、1027B、1032B、1047B、1047B、1082B、1083B、1101B、1183B）、法華会（979B） ※六郷山関連（すべてF） 正月会、修二月会、長日初後夜入堂読誦経典、観音経、法華八講、薬師講、安居または不断供花、大念仏、往生講、仏名経、大般若会、一万巻心経会、曼荼羅供、不動行法、仁王会、千手陀羅尼、尊勝陀羅尼、最勝講、金剛般若経、長日護摩、舎利会。
人物	最澄（803）、空海（807）、円珍（852）、大江匡房（1100）、平清盛（1162）、相実（1162）

飛鳥時代から平安時代にわたる約650年の間に、文献上確認できる仏教絵画関連事項はわずか８件で、そのうち現存作例は皆無である。書跡・経典はそれに比べると多く37件で、現存作例は７件である。書籍・経典では法華経が13件と最多である。

法会については、官寺・准官寺関連では、戒壇院での授戒をはじめとして顕密にわたるものが14件確認できる。安楽寺では、三宇の法華堂のほか、常行堂、多宝塔など天台寺院としての堂宇が次々に建設され、平安時代末期には堂塔数約三十、僧侶の数二百名ほどの規模をもち、法華三昧の13件をはじめとして、勧学会、経講・談義、法華会など天台系の法会が行われていたことが『天満宮安楽寺草創日記』から確認できる（注08）。宇佐八幡では、元来土俗的性格が強かった仏教に平安時代初期には最澄・空海が関心を寄せたが、宇佐宮神宮寺の弥勒寺では、永保元年（1081）の新宝塔造立を機に、また国東半島に成立した六郷山では、保安４年（1123）本家職を比叡山に寄進して以降、比叡山が領主としての支配体制を構えるようになり、天台系の法華信仰や浄土信仰に関わる儀礼、修験道系の護摩供や不動行法にいたる様々な仏教思想の反映が認められる法会・儀礼が行われていたという（注09）。安楽寺や六郷山の寺院のそれぞれの堂宇の本尊名称が記録から知られるが、本尊は主に彫刻が主流であったと考えられ、記録には画像に関する事項はほとんど見いだせない（注10）。

平安時代の儀礼に関する佐々木宗雄の研究によれば、９世紀にはじまる「公的」国家仏事―御斉会、季御読経、仁王会をはじめとする三会（興福寺維摩会、薬師寺最勝会）など―の周辺で、天皇、院宮、摂関がそれぞれの家政機関の執行により私的仏事を営み、それ以外にも一般寺院に

おける仏事が行われていた（注11）。さらに平安時代中期以降、涅槃会や来迎会など臨時の法会が盛んになったとされており、11世紀後半からは北京三会をはじめとする院権力に依存する多くの国家仏事が開始された。泉武夫氏は、王朝時代の質量ともに頂点を極めた仏画制作の背景に、朝廷を中心とする天皇や院をはじめとする貴族の主催する公私の儀礼の興隆があったことを指摘されている（注12）。

北部九州の仏教芸術関連の顕著な出来事を主導した人物を挙げると、延暦22年（803）、最澄が竈門山寺にて渡海の無事を祈り薬師仏造像と共に法華、涅槃、華厳、金光明経の説講を行い、帰国後六所宝塔の内二ヶ所を筑前と豊前に建立することを構想している（注13）。また大同２年（807）、唐から帰国した空海は観世音寺に住み、大宰少弐田中某の亡母の法事のために仏画を描かせている（注14）。仁寿２年（852）元旦、円珍は城山四王院にて帰朝の日までの読経を始め、９月には同院にて『大毘盧遮那経指帰』などを撰している（注15）。俗人としては、院政期を代表する文人官僚で浄土教信者であった大江匡房が、大宰権帥として下向し、康和２年（1110）安楽寺天内に満願寺を建立し色紙法華経を安置している（注16）。安楽寺では、応保２年（1162）、平清盛が法華経千部と会料荘園の施入をし（注17）、相実の本願により千部会が始められた（注18）。真言・天台の高僧、文人官僚、太政大臣などが、当地の仏教芸術を主導した事例が認められる。

第３節　往生伝から見る仏教信仰

これまで、北部九州の仏教芸術や法会について、文献記録からの考察を加えた。次に、そのような仏教芸術を支えていた当地の仏教信仰の状況について、往生伝を中心とした仏教説話集から考察を加える（注19）。平安時代の往生伝類に収録された九州関連の人物の説話は下記の通りである。

１、鎮源『大日本国法華験記』（長久年間〈1040年代〉成立）（注20）

ア、薩摩国の持経の沙門某、焼身供養す。生前、法華懺法や千部法華経読誦などを修する。（第15）

イ、持経者である神明寺の睿実法師、鎮西にて法華経錬誦の威力により肥後守の妻を病を除く。（第66）

ウ、一宿の沙門行空、法華経１部のみ具して五畿七道を遊行し鎮西に出る。（第68）

エ、鎮西の餌取法師浄尊、往生す。生前持仏堂にて「法華懺法」を修す。（第73）

オ、筑前入道乗運、筑前守に任じ、帰洛して剃髪し往生す。生前「法華経読誦」「仏像造立」「長日講」などを修す。（第95）

カ、肥後国八代郡の比丘尼舎利を誹謗する国分寺僧や宇佐神宮寺僧、死亡す。大安寺戒明法師を難詰す。「法華経一部・華厳経一部暗誦」（第98）

キ、大隅掾紀某、法華経の威力により難を逃れる。「法華経受持、読誦」す。（第107）

ク、肥後国の官人某、土中に込められた法華経の文字により、羅刹の難から逃れる。その後、仏法に帰依し「法華経受持読誦」す。（第110）

ケ、筑前国優婆塞、法華経普門品読誦の功徳により香椎明神神事のための殺生を免れ往生す。世人「念仏・懺法」を修して廻向す。（第116）

コ、筑前国の盲女、法華経読誦の功徳により目が開く。（第122）

２、大江匡房『続本朝往生伝』（康和３年〈1102〉頃成立）（注21）

サ、沙門能円、観世音寺傍の極楽寺にて往生す。「千日法華経講」（第22）

シ、太宰府大山寺沙門高明、往生す。清水寺にて「如法経書写」（第23）

ス、安楽寺学頭安修、往生す。「千日講三編」「六時三昧七旬」（第24）

セ、源忠遠妻、太宰府にて往生す。（第42）

３、三善為康『拾遺往生伝』（天永２年〈1112〉-保延５年〈1139〉成立）（注22）

ソ、最澄、竈門山にて薬師像４躯を造顕し、法華・涅槃・華厳・金光明経を講ず。また八幡宇佐宮寺と賀春神宮寺にて法華経を講ず。（上第３）

タ、安楽寺住僧大法師順源、往生す。（下第５）

チ、内山の禅僧、法華経読誦により往生す。（下第７）

ツ、安楽寺学頭頼暹、往生す。「往生講」を修す。（下第８）

４、三善為康『後拾遺往生伝』（保延３年〈1137〉-保延５年〈1139〉成立）（注23）

テ、薩摩国府の旅僧、入海し往生す。（上第４）

これらの19人は、ソの最澄以外、中央貴族的階層はみえず、ほとんどが地方民衆的階層である。功徳作善の内容は、受持読誦９人に次いで法華懺法５人・経講５人など法会が多く、他に写経１人・造仏１人・往生講１人である。院政期の仏教芸術制作の中心人物の一人であった白河院の生来善根の「絵仏五千四百七十余体」と比較したとき、写経や造仏に比べても絵像制作がいかに貴族的な作善であったかがわかる（注24）。

第２章　経塚遺品の検討

１章で北部九州の仏教美術について、現存作品と文献記録の双方において狭義の仏教絵画作品は乏しいこと、しかし寺院の記録からは天台浄土教の影響を受けた法会や儀礼が行われていたこと、さらに往生伝からは庶民たちが法華経受持読誦、法華懺法、経講などの方法で作善を実践していたことが確認された。このような平安時代北部九州の仏教芸術･信仰のありかたをふまえて、現存する作品を、法会の視点から再考してみよう。以下に北部九州の広義の仏教絵画作品ーすなわち経塚関連の絵画的作品を含むーの現存作品12件を挙げる（注25）。このうち９件までが経塚遺物、２件が経典見返絵であり、経典に関わる絵画が大部分を占める。

【表４】「北部九州の仏教絵画」現存作品

	時　代	作品データ	所　蔵
1	承暦３年 （1079）	線刻釈迦三尊像、金剛界四仏と四天王坐像 （伝福岡県香椎宮境内出土銅製経筒、２口ヵ）	小田富士夫氏 論文掲載
2	永保３年 （1083）	線刻阿弥陀来迎図、釈迦、薬師、弥勒像 （大分県山香町津波戸山出土銅製経筒、１口）	個人蔵
3	永久２年 （1114）	線刻天部２躯像 （福岡市早良区飯盛経塚出土瓦経、約300枚のうち） ※経典は法華経開結、仁王経、般若心経	太宰府天満宮所蔵
4	保延７年 （1141）	線刻普賢十羅刹女像・二菩薩・二天、法華種子曼荼羅 （伝福岡県出土銅製経筒・滑石製外筒、２合） 経筒身側面陰刻銘「保延七年歳次辛酉二月十五日勧進／延暦寺僧定尋／族姓大神長寿丸」 外筒身側面陰刻銘「南无破地獄真言／南无随求陀羅尼／南无大仏頂陀羅尼／南无光明真言、南无妙法蓮華経／南无勝尊陀羅尼」	奈良国立博物館所蔵 重要文化財
5	保延７年 （1141）	線刻六観音、五仏（釈迦三尊・不動・毘沙門）種字、真言、阿弥陀五仏種字、金胎大日種字 （銅板法華経および銅箱板、19枚附４枚） ※経典は法華経	大分長安寺所蔵 （附、東京国立博物館ほか分蔵） 重要文化財
6	康治元年 （1142）	線刻釈迦・薬師ヵ（二仏並坐）、阿弥陀三尊、不動、毘沙門像 （求菩提山出土銅板法華経33枚および銅箱１合） ※経典は法華経、梵字般若心経	福岡国玉神社所蔵 国宝
7	天養元年 （1144）	線刻大日如来、阿弥陀三尊、釈迦三尊、薬師ヵ（阿シュク）三尊、尊名不詳三尊像 （佐賀市築山経塚出土瓦経、229枚のうち５枚） ※経典は法華経并開結、阿弥陀経、法華懺法	佐賀市教育委員会保管 重要文化財
8	久安３年 （1147）	彩色仏像 （太宰府天満宮境内経塚出土土製彩絵経筒、１口） ※白色顔料下地、金箔を施す	東京国立博物館所蔵 重要文化財
9	承安２年 （1172）	紺紙金字観普賢経見返絵 （１巻）	久留米善導寺所蔵 重要文化財
10	12世紀	線刻菩薩２躯、四天王４躯、天部２躯像 （伝福岡県出土金銅厨子型経筒扉内、１口）	奈良国立博物館所蔵
11	12世紀	紺紙金字法華経巻第八見返絵 （１巻）	太宰府観世音寺旧蔵
12	12世紀	富貴寺大堂壁画 （正面３間側面４間堂、１宇）	大分富貴寺所蔵 国宝

このうち、本稿で検討の対象としたいのは、４の保延７年銘の銅製経筒･滑石製外筒である（注26）。本作品は、法華種字曼荼羅が滑石製外筒に【図1】、普賢十羅刹女図が銅製経筒に【図2】陰刻されており、それぞれの図像に関し、現存する最古の年紀銘作品である点で仏教絵画史研究の上で重要視されてきた。本稿では特に二図像が組み合わされている点に着目して考察する。

まず本作品の法華種字曼荼羅が陰刻された滑石製外筒から考えてみたい【図3】（注27）。

法華曼陀羅は法華経法において用いられる。法華経法は『法華経』を主体とする密教的法会で、不空作『法華経観智儀軌（以下儀軌と呼ぶ）』（注28）にもとづく。日本には入唐僧を通じて平安初期から請来され、平安後期から鎌倉初期にかけて密教の流派すべてにおいて流行した（注29）。

法華曼荼羅の文献上の初見は、天暦５年（955）の村上天皇が故太皇太后のため宸筆法華経とともに刺繍法華曼荼羅一鋪を供養したという記録で、その後11世紀後半から12世紀にかけて14件

の記録が確認できる（注30）。記録からは、法華曼荼羅が、法華経法だけでなく八講や法華三昧に用いられ、『法華経』のみならず開結経、『阿弥陀経』、『転女成仏経』などの諸経や、釈迦・多宝をはじめとする仏像とともに供養されていたことが知られる。また承暦３年（1079）供養の法成寺釈迦堂柱絵や同三昧堂の四柱間と四面の壁として、さらに応徳３年（1086）供養された多宝塔の壁画としても描かれた。追善逆修の目的がほとんどで、14件中11件が女性に関わる。

法華曼荼羅の現存作例は、鎌倉時代以前に限定すると12点で、絹本着色の作例が６点、木彫が１点（平安時代）、経塚関連としては、絹本墨書（1111年）【図3】、滑石製経筒陰刻（本作品）（1141年）、瓦経陰刻（1143年）【図4】、銅宝塔の塔身陰刻（平安時代）、そして鎌倉時代の経典見返絵【図5】が各１点である（注31）。経塚関連の５点のうち、願文を伴う作品が２点ある。その願文によれば、絹本墨書作品【図4】は、比丘尼法薬が永久２年（1114）に高野山奥の院に埋納した一連の遺物に含まれる作品で、法華懺法100日間の結願の日に、法華曼荼羅を図絵し、法華経一部を書写し、自読千部法華経結願を迎えている（注32）。播磨極楽寺経塚の瓦経【図5】は、願主東寺真言僧の禅慧が康治元年（1142）以来、康治２年（1143）から翌年にかけて結縁を募り、常行・法華三昧、長日法華講、念仏などの法会を行い、諸「曼荼羅」「仏菩薩像」「顕密経典」「諸真言」などを供養した一連の作善の一部である。（注33）。いづれの場合も、法華曼荼羅は単独ではなく、他の曼荼羅・仏像・経典・真言と共に制作され、書写読誦・法華三昧（懺法）・経講などの法会を伴っている。本作品には関連史料も願文もないため制作背景は不明であるが、法華曼陀羅を彫った蓋をもつ外容器の中心に、銅製塔型の経筒を立て、その経筒に経典をこめるという方法は、法華経法の儀軌にある、法華曼陀羅の中央に塔を描き経典を安置するという大檀法の応用と考えられ（注34）、本作品は法華経法の本尊として制作されたものであると推定できる。

次に普賢十羅刹女図の線刻された銅製経筒について考えてみたい【図2】【図7】（注35）。

本作品は、合掌する普賢菩薩像が向かって斜め左向きに表され、その左右に五体ずつの羅刹女が前後二列に並び、後列のさらに後ろに二天が立ち、上空左右に二菩薩が雲上に坐して描かれる。普賢は蓮華座に結跏趺坐し、その下に象は描かれておらず、羅刹女は足下に氈毹座を踏む。普賢を取り囲む天や菩薩は、普賢に向かって左右対称の構図をなしている。上空の二菩薩は雲の尾を外に曳き中心に向かって飛来する様に描かれている。普賢菩薩来儀図に十羅刹女等を加えた普賢菩薩十羅刹女図の一例であるとみなせる。

普賢菩薩来儀図は、『法華経』勧発品と『観普賢経』に説かれる法華経持経者のもとに白象に乗り現れる普賢菩薩の姿を描いたものである。普賢菩薩が合掌する図像は、円仁の将来した図像に基づくとされ、日本では天台寺院の法華三昧堂の本尊として初めは彫刻として、平安時代中期以降は貴族階級の法華三昧（懺法）の本尊として多くの画像が生み出され、しだいに『法華経』にまつわる追善・逆修の仏事の本尊として盛んに制作されるようになる。

十羅刹女図の造像記録では、承暦３年（1079）の法成寺釈迦堂扉に十六羅漢、多聞天・持国天ほかと共に「十羅刹、哥梨底母」が描かれたという例が初見であり、以後鎌倉時代の嘉元３年（1305）にかけて13の例が知られている。現存作例では、平安時代から鎌倉時代にかけて20点余

が確認されており、年紀のある現存最古の作品は、天永３年（1112）創建の鶴林寺太子堂（法華堂）柱絵で、それに続くのが本経筒である。本経筒は、普賢と十羅刹女以下を一図中に構成した作品としては最古となる。ほかに平安時代に遡る作品として、絹本着色の廬山寺本（12世紀）、愛媛県出土経筒線刻画（12世紀）、紺紙金字観普賢経見返絵の厳島神社甲本（12世紀）【図9】と善通寺本（12世紀）【図10】、装飾法華経見返絵の香川歴博本（12世紀）が挙げられる（注36）。

普賢菩薩十羅刹女図は変化に富んだ構図を示すが、有賀氏は、これらの遺例の構図を三つの類型―第一類の諸尊が画面下方を歩み進むよう描かれる、第二類の諸尊が右上から左下へ降りるように描かれる、第三類の諸尊が雲上に描かれるもの―に分類し、その展開の理由として、阿弥陀来迎図の影響を指摘されている（注37）。第一類型に分類される鶴林寺本、本経筒、廬山寺本、愛媛県出土経筒の中で、鶴林寺本と本経筒では、普賢菩薩の蓮台の下に象は描かれず、特に本作品の十羅刹女は左右対称に氈毹座上に立つため、全くといっていいほど動きは感じられない。静止した印象の強い尊像構成であり、来儀の意味が薄れているといえよう。

本作品にみられる法華曼荼羅と普賢十羅刹女の二図像の組み合わせは、法華経信仰に基づくことは言うまでもない。記録では、両図像とも平安時代中期以降、しばしば女性の追善・逆修を目的とした法華経にまつわる法会で用いられ、また、法成寺では同じ釈迦堂に法華曼荼羅と十羅刹女が描かれていた。両図像が、制作・受容の環境を共有していたことは明らかである。しかし、法華曼荼羅は密教の法華経法の本尊で儀軌に基づく図像、普賢十羅刹女図は法華三昧の本尊として成立・展開してきたと考えられる儀軌を持たない図像で、性格を異にする（注38）。

ここで、両図像の組み合わせの成立する具体的な接点を、儀軌のある法華経法の方から考えてみよう。法華経法は、滅罪生善頓証菩提のために、両部合行の法により『法華経』を修持するもので、『儀軌』にはその作法が段階を追って説かれるが、念誦の部分で、『法華経』陀羅尼品にある、薬王菩薩、勇施菩薩、毘沙門天、持国天、十羅刹女が法華経持経者を守護するために唱える真言が引用されている（注39）。本図は、法華経法大壇の中心に置かれたと考える経典の容器に描かれている。本図にみられる左右対称に中心を向いて並び立ち、静止した印象を与える十羅刹女の構図は、法華経法の行われている場を守護するために現れた姿と考えられるのではないか。増木氏は、普賢十羅刹女の図像の成立に、法華三昧堂において十羅刹女が行者を守護すべく、扉壁画や彫像として、普賢菩薩と併置されたことが寄与した可能性は高いとされている。本作品のやや特異な普賢十羅刹女の図像に関しても、法華経法という法会を成立の場として想定することができよう。また本作品の場合、法華曼荼羅と普賢十羅刹女にさらに真言が組み合わされており、本作品の成立・受容の背景として、埋経儀礼のみならず法華法、真言念誦といった天台密教の複合的な信仰活動が窺える（注40）。

むすび　北部九州の仏教絵画―経典のための仏画―

平安時代後期に全国に普及した埋経活動を法会の視点から再検討すると、たとえば康治２年

(1143) 銘の極楽寺出土瓦経の長文の願文には、「精進潔斎」し「造請浄瓦」の上に「曼荼羅」「仏像」「真言」「顕密経典」以下経典を書写し、「真言」を頌し、焼く間に六七日中「如説懺悔」したことが述べられ、作者は「仏師」と称されている（注33)。比丘尼法薬埋納経の場合は、仏像造立、仏画図絵、写経と共に諸法会を勤修し、百箇日の法華懺法結願の日に法華曼荼羅を図絵している(注32)。そもそも埋経の根拠となったと考えられる如法経作法には、四種三昧が伴われている。経塚はそれらの法会の痕跡といえよう。北部九州において埋経は、全国に先駆けて本格化しその出土数も他地域を圧倒している。数多くのこる経塚は、この地で行われていた仏教活動の証である。

永久２年（1114）安楽寺銘経筒（注41）には「六百日之間五種修行」とあり、経典の受持読誦書写解説の五種法師の修行こそが法華経信仰の神髄であったことをあらためて想起させる（注42)。平安時代の仏教美術史を代表するいわゆる王朝仏画は、都の摂関貴族や院を中心とする発願者が、その権勢を動員して僧綱仏師や絵仏師に制作させ、多数・多壇の大掛かりな供養を行った痕跡である（注43)。地方では、勧進僧が中心となり庶民らの結縁により、清浄なる泥や水などを用い、瓦や銅や石を素材とした経典のための画像が、経筒や瓦経の線刻として制作され残されている。翻って考えると、美麗仏画をうみだした、都における貴族的な宗教と芸術の融合した場の成立は、歴史的にも地域的にもきわめて限定された、特殊なものであったといえよう。

【作品データ】

（図１）滑石製外筒（伝福岡県出土）1141年　奈良国立博物館所蔵
（図２）銅製経筒（伝福岡県出土）1141年　奈良国立博物館所蔵
（図３）陰刻法華種字曼荼羅（図１外筒蓋）
（図４）絹本墨書法華種字曼荼羅（高野山奥院経塚出土）1111年　和歌山高野山金剛峯寺所蔵
（図５）瓦経法種字華曼荼羅（極楽寺経塚出土）1143年
（図６）紺紙金泥法華種字曼荼羅（般若寺石塔納入法華経并開結見返絵）13世紀　奈良般若寺所蔵
（図７）線刻普賢十羅刹女図（図２経筒展開図）
（図８）紺紙金字観普賢経見返絵（厳島神社甲本）12世紀　広島厳島神社所蔵
（図９）紺紙金字観普賢経見返絵（善通寺本）12世紀　香川善通寺所蔵

図１　滑石製外筒（伝福岡県出土）1141年

図２　銅製経筒（伝福岡県出土）1141年

図３　陰刻法華種字曼荼羅（図１外筒蓋）

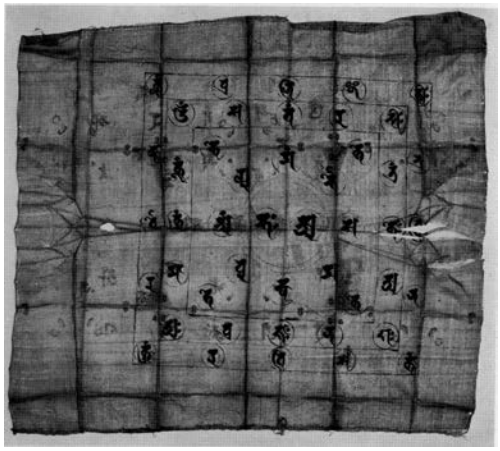

図４　絹本墨書法華種字曼荼羅
（高野山奥院経塚出土）1111年

図５　瓦経法種字華曼荼羅
（極楽寺経塚出土）1143年

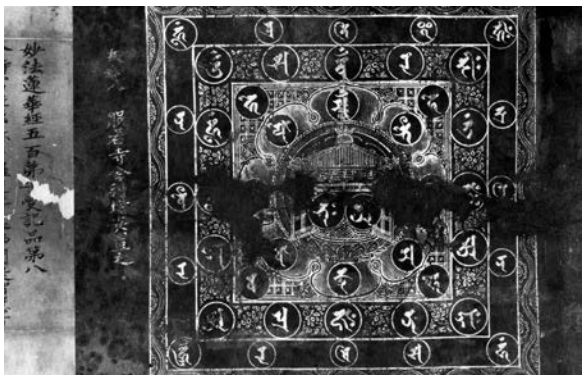

図６　紺紙金泥法華種字曼荼羅
（般若寺石塔納入法華経并開結見返絵）13世紀

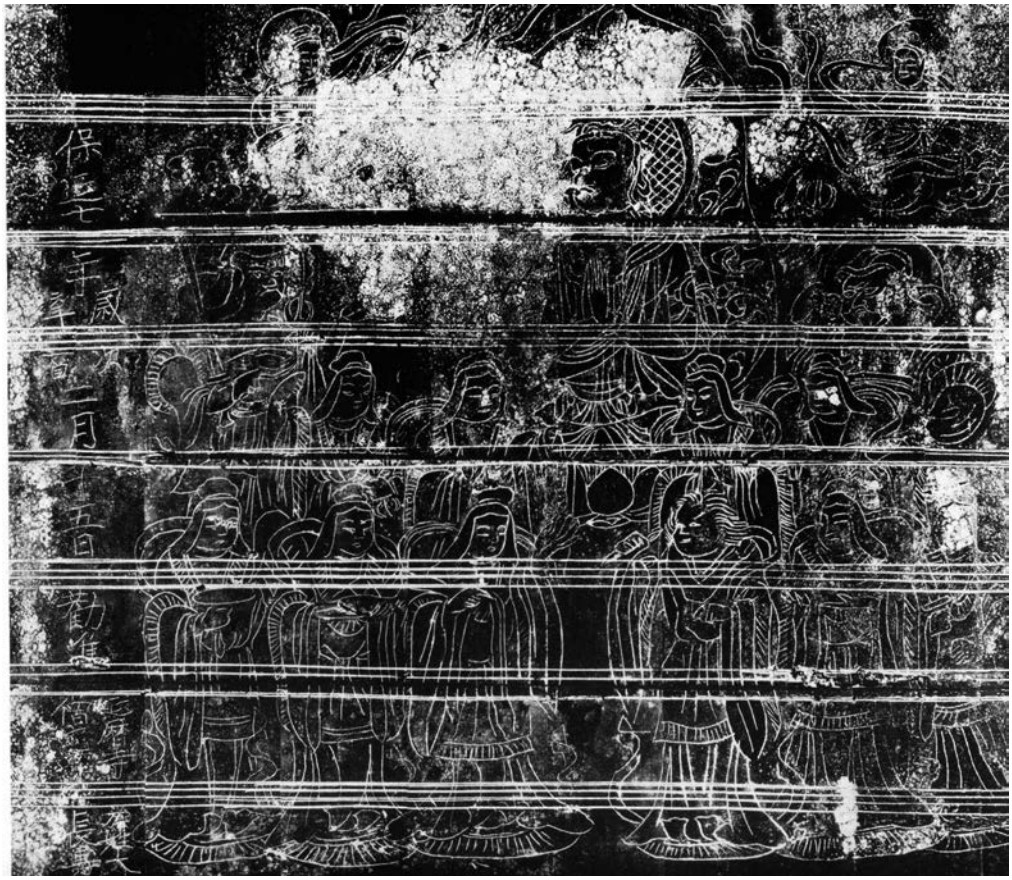

図７　線刻普賢十羅刹女図（図２経筒展開図）

図８　紺紙金字観普賢経見返絵
（厳島神社甲本）12世紀

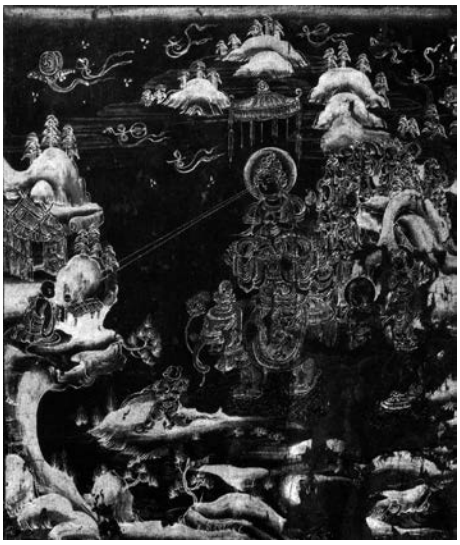

図９　紺紙金字観普賢経見返絵
（善通寺本）12世紀

【注】

01）九州の仏教絵画については下記を参考にした。

①福岡県文化会館美術館『九州の仏教美術―仏教伝来から室町時代まで―』1969年。

②佛教藝術学会編『佛教藝術』76号、九州の仏教美術特集、1970年、毎日新聞社。

③保坂三郎『経塚論考』1971年、中央公論美術出版。

④谷口鉄雄・八尋和泉「九州における仏教美術」（福岡ユネスコ協会『九州の絵画と陶磁』1975年、平凡社）

⑤奈良国立博物館『国宝重要文化財仏教美術九州１』1976年、小学館。

⑥奈良国立博物館『経塚遺宝』1977年、東京美術。

⑦澤村仁「九州の古建築」（『日本古寺美術全集20観世音寺と九州・四国の古寺』1981年、集英社）

⑧八尋和泉「九州の飛鳥・奈良時代の仏像―九州仏像彫刻史の一節として―」（『九州歴史資料館会館十周年記念大宰府古文化論叢下巻』1983年、吉川弘文館）

⑨関秀夫『経塚遺文』1985年、東京堂出版。

⑩大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『弥勒憧憬』1992年。

⑪太宰府市史編集委員会『太宰府市史　建築・美術工芸編』1993年、太宰府市。

⑫小田富士夫「九州における経塚とその背景―佐賀県築山経塚発見に寄せて―」（大和町教育委員会『佐賀県築山経塚』1994年）

⑬平田寛『九州仏教美術史年表　古代･中世篇』（長崎純心大学学術叢書４）2001年､九州大学出版会。

⑭平田寛『九州美術史の途』2001年、長崎純心大学。

⑮太宰府市史編集委員会『太宰府市史　古代資料編』2003年、太宰府市。

⑯九州国立博物館『未来への贈りもの』2007年。

⑰八尋和泉「埋経と仏像」（小田富士雄・平尾良光、飯沼賢司編『経筒が語る中世の世界』（別府大学文化財研究所企画シリーズ①「ヒトとモノと環境が語る」）2008年、思文閣出版）

⑱九州国立博物館『古代九州の国宝』2009年。

02）「だざいふ」の表記は、律令制下の役所と官職に関わる場合は「大宰府」、地名の場合は「太宰府」を用いる。

03）小田富士夫「九州の古代寺院―とくに七・八世紀の創立寺院について―」、注１⑧前掲書。

04）中野幡能「宇佐氏五代と荘園の拡大」（『宇佐宮』1985年、吉川弘文館）

05）矢崎美盛「地方様式」（『芸術学』1951年、弘文堂）

06）文化庁ホームページ「国指定文化財等データベース」より

07）【表３】「北部九州の仏教絵画関連事項」は、下記の史料集成などを元に作成した。

Ａ平田寛注１⑮前掲書、Ｂ澤村仁「天満宮安楽寺」（注１⑪前掲書）および竹内理三「太宰府天満宮の古文書―特に中世以前―」（注１⑧前掲書）、Ｃ注１⑮前掲書、Ｄ竹居明男編『天神信仰編年史料集成―平安時代・鎌倉時代前期―』（2003年、国書刊行会）、Ｅ竹内理三編纂『大宰府・太宰府天満

宮史料』（1964年-2009年、太宰府天満宮）、Ｆ中野幡能「六郷山の宗教儀礼」（『八幡信仰史の研究』1975年、吉川弘文館）。

08）澤村仁注７前掲論文

09）六郷山寺院の成立について、中野幡能氏は平安時代中期ごろとし、「仁安目録」から山号と名称、「安貞目録」から本尊が知られると指摘する。中野幡能「六郷山の開発と推移」（注07前掲書）参照。一方海老沢衷氏は、両史料に疑問の余地があるとして、六郷山成立は鎌倉時代に下るとする。海老沢衷「富貴寺の歴史的環境」（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『富貴寺』1984年）参照。

10）長岡龍作氏は、古代の仏教儀礼の中心をなしていた悔過と仏像の結びつきの強さを指摘している。長岡龍作「悔過と仏像」（『鹿園雑集』８号、2006年）参照。北部九州の古代の仏教絵画の空白に近い状況に関して、記録に残らないまま作品が失われたという仮説の以外に、当地の法会において画像が用いられる事が少なかったとの仮説も成り立つであろう。本稿ではこの仮説を検証する。

11）佐々木宗雄「王朝国家期の仏事について」（『古代文化』35号、1993年）

12）泉武夫「王朝仏画論―儀礼と絵画―」（京都国立博物館『王朝の仏画と儀礼』2000年、至文堂）

13）『叡山大師伝』（『伝教大師全集』５巻、16頁）「延暦廿二年潤（閏）十月廿三日、於大宰府竈門山寺、為四船平達、敬造檀像薬師仏四躯、高六尺余、其名无勝浄土善名称吉祥王如来、又講説法華、涅槃、花厳、金光明等大乗経、各々数遍、具如願文（後略）」

14）「巻第七為田少弐設先妣忌斎願文」『遍照発揮性霊集』巻第７（弘法大師空海全集編輯委員会『弘法大師空海全集』６巻、1984年、筑摩書房、448頁）「是を以て大同二年仲春十一日、恭うて千手千眼大悲菩薩、並びに四摂八供養摩訶薩埵等の一十三尊を図絵し、并に妙法蓮華経一部八軸、般若心経二軸を写し奉り（後略）」

15）『園城寺文書』（注７前掲書『大宰府・太宰府天満宮史料（以下、大宰府史料とする）』２巻、19頁）「奉読／法華経三百八十四巻〈毎日一巻〉／金剛般若経三百八十四巻〈毎日一巻〉／金剛寿命経七百五十巻〈毎日五巻〉、／不動尊真言五万九千遍〈毎日三百遍〉／延命真言三万九千遍〈毎日三百遍〉／右、十禅師円珍、始自仁寿二年正月一日、至于帰朝之日、奉為聖主祈八幡明神、今沙弥二人住山四王院奉修件事（後略）」、『大毘盧遮那経指帰』（東寺本）巻末押紙書（『大宰府史料』２巻、18頁）「大日経指帰根本批記云、日本国上都比叡山延暦寺大毘盧遮那習業沙門円珍巡遊之次、宿于鎮西府城山天王院、案本文集記、時仁寿二年秋末也〈已上〉」、『大日経心目』（石山寺本）奥書「書本云、日本国上都比叡山延暦寺真言習業内供奉沙門円珍、遊天台次、屈於鎮西府城山四天王院、案経釈賛述之、大日毘盧遮那仏心目也」（『大宰府史料』２巻、15頁）

16）「安楽寺内満願寺供養願文」（平泉澄校勘『江都督納言願文集』1929年、至文堂、131頁）「因茲託此廟院、聊営土木、奉造立一間四面堂一宇、奉安置丈六金色阿弥陀如来像一躯、奉書写色紙妙法蓮花経一部八巻、無量義経、観普賢経、般若心経各一巻（中略）康和二年九月十九日　弟子従二位権中納言兼都督大江朝臣」

17）『天満宮安楽寺草創日記』（竹内理三注７前掲論文、202頁）「一切経蔵（中略）／但千部会者、応保二年〈壬午〉三月六日始之、／願主天台山住侶宰相法印相実也、／法華経千部并開結二経者、平家

大政大臣（清盛）施入也、会料牛嶋庄所当分六十斛寄之」

18）『息心抄』（叡山文庫本）奥書「此是金剛界入秘密曼荼羅也、依師伝於大宰国安楽寺依新同法義請略抄了、応保二―〈壬午〉閏二月十三日堅固金剛相了字百寿記之、（後略）」から、応保２年（1162）閏２月13日、百寿（相実の号）が、太宰府安楽寺にて、『息心抄』を略抄したと知られる。したがって同年３月６日の安楽寺千部会願主「天台山住侶宰相法印相実」は、台密法曼流の祖の相実（1081－1165）である可能性が高い。大森眞應「法曼流祖相実法印に就て」（『山家学報』８号、1918年）参照。

19）仏教説話集を対象とした平安時代仏教史研究として、船ヶ崎正孝「平安時代の地方と仏教」（『日本庶民仏教の研究』1962年、同文書院）、井上光貞「文献解題―成立と特色―」（井上光貞・大曽根章介校注『続・日本仏教の思想Ⅰ　往生伝　法華験記』1974年、岩波書店）、高木豊「『法華験記』の持経者」（『平安時代法華仏教史研究』1988年、平楽寺書店）を主に参考にした。

20）『大日本国法華験記』（注19前掲書『続・日本仏教の思想Ⅰ　往生伝　法華験記』）43-219頁。

21）『続本朝往生伝』同前221-254頁。

22）『拾遺往生伝』同前278-392頁。

23）『後拾遺往生伝』同前641-670頁。

24）藤原宗忠『中右記』（大治４年〈1129〉７月７日条）「或る人云わく、本院（白河院）年来御善根、／絵像五千四百七十余体、／生丈仏五体、丈六百廿七体、半丈六六体、／等身三千百五十体、三尺以下二千九百卅余体、／堂）七宇、塔二十一基、小塔四十四万六千六百卅余基／金泥一切経書写／此の外秘法修善千万壇、その数を知らず」

25）【表４】「北部九州の仏教絵画現存作例」は、八尋和泉注１⑰前掲論文を参考にして作成した。

26）本経筒は円筒形四段輪積式で、相輪紐状の伏鉢形の傘蓋、二段盛上式七花形の基台を備える。経筒の側面に数条一束の刻線を等間隔で上下七カ所に巡らし、全面に普賢十羅刹女を細く浅い線で刻む。外筒は胴張をもたせた円筒形の筒身で、緩やかな甲盛をもつ円盤状の蓋を備える。蓋上面と側面、身の上部にかけて法華曼荼羅の種字を、身の下部には漢字の真言を刻む。外筒の蓋の頂上の穴から、経筒の相輪が突き出す仕組みである。本作品は伝福岡県出土と知られるのみではあるが、経筒の輪積式の構造、外筒の滑石の材質はともに北部九州に特有の者であり、伝承の該当性する確率は高い。原田一敏「経筒の制作と地域性」（注１⑰前掲書）参照。

27）法華曼荼羅については、倉田文作・田村芳朗監修『法華経の美術』（1981年、佼成出版社）、梶谷亮治「法華経見返絵の展開」（奈良国立博物館『法華経―写経と荘厳―』1985年、東京美術）、ドルチェ・ルチア「台密における法華経解釈と儀礼―法華法と法華曼荼羅について―」（『天台学報』（国際天台学会論集）、2007年）、三崎良周「青蓮院吉水蔵『法華別帖』より見た慈鎮和尚の密教思想」（『台密の理論と実践』1994年、創文社）を主に参考にした。

28）法華経法に関しては、儀軌として不空訳『成就明法蓮華経王瑜伽観智儀軌』（大正蔵経巻第19、No1001）、図像として『図像抄』『別尊雑記』（大正図像巻第３）『覚禅抄』『興然曼荼羅集』（大正図像巻第４）、『阿娑縛抄』（大日本佛教全書）がある。

29）空海『御請来目録』には『儀軌』があり、円仁『入唐求法目録』には『儀軌』とともに「法華曼荼羅様」とある。各時代の台密にとって法華経法の実修は重要であり、慈円は生涯13度の法華経法を修し、法華経法に関する著述『法華別帖』を撰述している。ドルチェ・ルチア氏、三崎氏注27前掲論文参照。

30）法華曼荼羅の文献記録については梶谷氏「平安時代の諸記録にみる法華経絵と遺例」（注27前掲論文）を参照。

31）法華曼荼羅の現存作品（鎌倉時代以前）は下記の通り。

①絹本墨書法華種字曼荼羅、１面、縦39.0、横46.0センチ、天永２年（1111）（作善目録による）、高野山奥院経塚遺物、和歌山金剛峯寺所蔵、重要文化財。

②滑石製外筒陰刻法華種字曼荼羅、１口、総高40.2センチ、保延７年（1141）銘銅製経筒と一具。伝福岡県出土、奈良国立博物館所蔵、重要文化財。

③瓦経法華曼種字曼荼羅、１面、拓本として現存、康治２年（1143）銘願文含む全約500枚のうち。兵庫県極楽寺経塚出土遺物、兵庫県常福寺所蔵、重要文化財。

④木彫法華曼荼羅、１面、竪18.6センチ、平安時代、岐阜横蔵寺所蔵、重要文化財。

⑤銅鋳製宝塔、１基、総高71.5センチ、平安時代、塔身前面に法華種字曼荼羅、背面中央に大日如来法身真言、その左右に同報告身真言を線刻、奈良原山経塚遺物、愛媛奈良原神社蔵、国宝。

⑥法華曼陀羅、絹本着色、１幅、縦71.1、横58.5センチ、平安時代後期、奈良法隆寺所蔵、重要文化財。

⑦紙本墨書法華経并開結巻第４見返絵（紺紙金泥法華曼荼羅）、10巻のうち、縦14.2センチ、建長５年（1253）頃建立の十三重石塔納入遺物、奈良般若寺所蔵、重要文化財。

⑧京都松尾寺本（１幅、縦70.0、横68.5センチ）、⑨兵庫太山寺本（１幅、縦101.5、横81.8センチ）、⑩奈良唐招提寺本（１面、縦122.3、横86.2センチ）、⑪香川萩原寺本（１幅、縦113.0、横111.3センチ）、⑫奈良下部神社本（１幅、縦107.6、横73.7センチ、下辺に十羅刹女を表す）。以上すべて絹本着色、鎌倉時代、⑫以外は重要文化財。

32）「紺紙銀字作善目録」（『経塚遺宝』銘文集２、注１⑥前掲書）「奉造立／八寸不動尊像一躰（以下仏像９躰、中略）奉図絵／一服如意輪観音像一鋪（以下画像９鋪、中略）妙法蓮華経十三部〈三部書写十部模経〉／千手経三十三巻〈模経〉五十日講演〈逆修〉／書写五部大乗経〈五箇日供巻〉阿弥陀護麻三七箇日／妙法蓮華経一千部〈他人転読〉／修法華懺法百箇日〈天永二年六月六日結願　件日図絵法華曼陀羅一鋪　書写法華経一部自読千部法華経結願畢〉／自転読千手経一万四百二十六巻／自転読如意輪経二万九千巻／自転読観世音経三千巻／如意輪大呪五十万遍　小呪二百万遍／毘沙門小呪百万遍〈十度〉／阿弥陀念仏百万遍〈十度〉／袈裟四十五条／永久二年八月八日　仏弟子比丘法薬」

33）「極楽寺経塚瓦経願文」（注32前掲書、銘文集11）梵字法華曼荼羅奥書「奉書写／梵字法華曼荼羅/右始自此釈迦滅後二千余年（中略）／康治二年〈歳次癸亥〉八月廿七日金剛仏子禅慧」瓦経願文二「（前略）精進潔斎／造清浄瓦其上奉彫図写金剛界／九会法曼荼羅一槙胎蔵界十三大／会法曼荼羅一槙梵字阿弥（陀脱）曼荼／羅一槙梵字法華曼荼羅一槙／又同瓦上奉彫書写宝篋印陀羅尼／経一巻妙法蓮華経

一部八巻（中略）無垢浄光宝楼閣／光明真言菩提場百千印雨宝陀／羅尼滅悪趣破地獄滅罪随求」瓦経願文三「尊勝法身真言（中略）各一遍（中略）未焼之時以錐／書之書写之後積薪焼之是皆／六七日中如説懺悔一両年間書写／終功末法万年余経雖滅唯願此曼／荼羅仏菩薩像顕密経典諸真言／等久在地中至于当来星宿劫末利／物偏増而已古人有言曰瓦文不朽靖／而思之誠哉（後略）」

34）『阿沙縛抄』第71法華法「一経安置事。入経筥。〈若帙簀。〉大壇中心可安之。有敷曼荼羅者。壇不可置之。（中略）嘉保日記〈理智〉云。大壇上布置芬陀利白蓮華。其上安置御経箱。／理智房座主依大殿仰修之時。経箱下蓮華別物図絵、被敷」

35）普賢十羅刹女については、梶谷注27前掲論文、有賀祥隆『日本の美術　269号　法華経絵』（1988年、至文堂）、山本勉『日本の美術　310号、普賢菩薩像』（1992年、至文堂）、百橋明穂「廬山寺普賢十羅刹女像」（『仏教美術史論』2000年、中央公論美術出版）、増木隆介「普賢菩薩画像論」（大和文華館『特別展普賢菩薩の絵画ー美しきほとけへの祈りー』2004年）を主に参照した。

36）普賢十羅刹女の現存作品（平安時代以前）は下記の通り

①鶴林寺太子堂内陣柱絵（東南柱・南西柱）、天永３年（1112）建立、兵庫鶴林寺、国宝。

②線刻普賢十羅刹女図（銅製経筒）、１口、総高40.2センチ、保延７年（1141）銘、伝福岡県出土、奈良国立博物館所蔵、重要文化財。

③普賢十羅刹女図、絹本着色、１幅、縦97.5、横66.9センチ、平安時代、京都廬山寺所蔵、重要文化財。

④線刻普賢十羅刹女図（銅製経筒）、１口、総高28.5センチ、平安時代後期、香川県出土、個人蔵。

⑤紺紙金字観普賢経見返絵（厳島神社甲本）、法華経并開結10巻のうち、見返絵縦25.7、横20.0センチ、平安時代、広島厳島神社所蔵。

⑥紺紙金字観普賢経見返絵（善通寺本）、法華経并開結７巻のうち、見返絵縦25.6、横21.2センチ、平安時代、香川善通寺所蔵。

⑦装飾料紙法華経巻第八見返絵、８巻のうち、見返絵縦25.2、横21.7センチ、平安時代、香川歴史博物館所蔵、重要文化財。

37）有賀氏注35前掲書。

38）普賢十羅刹女図の羅刹女以下の眷属は、『法華経』陀羅尼品に説かれる。陀羅尼品では、薬王・勇施の二菩薩、毘沙門・持国の二天、十羅刹女と鬼子母らが、それぞれ陀羅尼を唱え、法華経持経者を守護することを誓う。このように普賢菩薩と十羅刹女以下の眷属は、ともに法華経持経者を守護することを本誓とする尊格ではあるが、『法華経』の経典中、別々の品で説かれ、両者を一具として組み合わせた経典も儀軌も見当たらない。唐時代に十羅刹女が描かれていた可能性はあるが、普賢菩薩との組み合わせの例は知られず、日本で独自に王朝女性の普賢菩薩信仰の高まりの中で成立したと推定される。

39）ドルチェ・ルチア氏注27前掲論文。

40）本経筒線刻真言中「南无（以下では略）妙法蓮華経」以外の５つ「破地獄真言」「随求真言」「大仏頂真言」「光明真言」「尊勝陀羅尼」のうち４つが極楽寺瓦経と共通している。

43）平田寛「美麗の絵師たち」（『日本美術全集８王朝絵巻と装飾経』1990年、講談社）

41）銅経筒陰刻銘（福岡県太宰府市太宰府出土）「南無釈迦牟尼如来／南瞻部州大日本国永久二年／甲午十一月二日癸酉筑前国／管御笠郡安楽寺［　］（中略）始自永久二年三月訖于今日□／月六百日之間五種修行［　］（中略）昼夜不断精進／如説勤修功徳（後略）」

43）『法華経』巻第10法師品「仏は薬王に告げたもう『又、如来滅度の後に、（中略）若しまた人ありて、法華経の乃至一偈を受持し、読・誦し、解説し、書写して、この経巻を敬い視ること仏の如くにして（中略）恭敬せば、（中略）この諸人等は、（中略）未来世において、必ず仏となることを得ん』と。」（岩波文庫本）『法華経』中、140～144頁）『梁塵秘抄』第２巻　法華経二十八品歌　法師品139（後白河法皇撰、12世紀成立）「妙法蓮華経、書き読み持てる人は皆、五種法師と名づけつつ、終には六根清しとか」（岩波文庫本『梁塵秘抄』34頁）

【図版出典】図６、８、９は奈良国立博物館『法華経―写経と荘厳―』（1985年、東京美術）、それ以外は注１⑥から複写した。

［附記］

本稿は、平成25年度太宰府学講座（10月５日開催、於太宰府文化ふれあい館）における講演「太宰府の仏教絵画―経典のための絵画―」の内容にもとづいている。

（こばやし　ともみ：アジア文化学科　講師）